

A. はじめに

1. セカンドオピニオンとは

大辞林，法律用語集，健康関連用語集などに言葉の定義が記載されていますが，概ね意味は同じであり，第2の意見（別の医師の意見）を求めることを意味します。中でも「国立がん研究センター，がん対策情報センター，がん情報サービス¹⁾」には，セカンドオピニオンの意味するところが詳しく記載されています。

【国立がん研究センター，がん対策情報センター，がん情報サービスより】

患者さんが納得のいく治療法を選択することができるように，治療の進行状況，次の段階の治療選択などについて，現在診療を受けている担当医とは別に，違う医療機関の医師に「第2の意見」を求めることです。セカンドオピニオンは，担当医を替えたり，転院したり，治療を受けたりすることだと思っている方もいらっしゃいますが，そうではありません。まず，ほかの医師に意見を聞くことがセカンドオピニオンです。担当医から説明された診断や治療方針について，納得のいかないこともあるかもしれません。「別の治療法はないのか」と思う場合もあるでしょう。セカンドオピニオンを受けることで，担当医の意見を別の角度からも検討することができ，もし同じ診断や治療方針が説明された場合でも，病気に対する理解が深まることもあります。また，別の治療法が提案された場合には選択の幅が広がることで，より納得して治療に臨むことができます。

2. セカンドオピニオンを受けるにあたり

セカンドオピニオンを求める場合，まずは主治医に話して他医への診療情報提供書を作成してもらう必要があります。意見を求められた医師は，これまでの治療経過や病状の推移を把握しないことには適切な助言をすることが難しいからです。その上で紹介先を受診し意見を求めることになります。このとき新たな検査を必要とすることもあります。セカンドオピニオン外来（自費診療）を受診する場合は，セカンドオピニオンは「診療」ではなく「相談」になるため，健康保険給付の対象とはならず，全額自己負担となります（なお保険医療機関を受診し保険証を提示して，患者が一般外来での保険診療を希望する場合

は、保険診療の取扱いとなる)。また、生活保護受給者に対しては、医師が必要と認めない場合は「自費診療」扱いとなるため、生活保護の医療扶助の対象外となってしまう、セカンドオピニオンを求めて、別の病院の医師に相談することが不可能となっています。医療において近年、治療効果だけでなくクオリティ・オブ・ライフも重視されるようになってきたことから、特にこれらを両立する方法が問題となる、がん治療や精神医療の投薬治療において注目されるようになってきました。

病状や進行度によっては時間的な余裕がなく、なるべく早期に治療を開始したほうがよい場合もあるので、セカンドオピニオンの準備は現在の担当医に現在の病状と治療の必要性について確認するところから始まります。まず、はじめの意見（ファーストオピニオン）を大切に複数の医師の意見を聞き、どれを選んでよいかわからなくなってしまうことのないように、最初に求めた担当医の意見（ファーストオピニオン）を十分に理解しておくことが大切です。ファーストオピニオンで、「自分の病状，進行度，なぜその治療法を勧めるのか」などについて理解しないままセカンドオピニオンを受けても、かえって混乱してしまいます。これまでの検査結果と説明を振り返ってみましょう。近年、がん医療を行っている病院では「セカンドオピニオン外来」を設置しているところが増えています。セカンドオピニオンをどこで受けるか迷う場合には、がん診療連携拠点病院のがん相談支援センターに問い合わせると、その地域のセカンドオピニオン外来を行っている病院や、専門領域などの情報を得ることができます。そのようなところを積極的に活用するのもよいでしょう。このほか、例えば「手術を勧められているけれども、放射線治療を検討したい」といった、具体的な治療方法に関する希望がある場合には、がんの放射線治療を専門とする医師にセカンドオピニオンを受けるという方法もあります。どの医療機関でセカンドオピニオンを受けるのかが決まったら、その医療機関の窓口で連絡して、セカンドオピニオンを受けるために必要な手続き（受診方法、予約、費用、診察時間、必要な書類など）を確認しましょう。セカンドオピニオン外来は、基本的に公的医療保険が適用されない自費診療で、病院によって費用が異なっています。また、セカンドオピニオンを受けるときに伝えたいこと、聞きたいことを整理し、自分の病気の経過と質問事項をメモしてから行くと、限られた時間を有効に使えます。できるだけ1人ではなく信頼できる人に同行してもらおうとよいでしょう。その際に、セカンドオピニオンの目的やこ

れまでの担当医の説明内容について、もう一度確認しておきましょう。

3. セカンドオピニオンを受けた後

セカンドオピニオンを受けたら、別の医師の意見を聞くことによって、あなたの病気や治療方針についての考えが変化したかどうか、もう一度現在の担当医に報告した上で、これからの治療法について再度相談しましょう。セカンドオピニオンに対する担当医の意見を聞くことで、治療への理解がより深まり、納得する治療を選択することができるようになります。また、セカンドオピニオンの結果、セカンドオピニオン先の病院で治療を受けることになった場合には、あらためてこれまでの治療内容や経過などを紹介状などで引き継ぐのが一般的です。治療はセカンドオピニオン先の病院で行い、紹介元医療機関では治療後の経過観察を行う場合もあります。そのため、紹介元の担当医はあなたの治療を支援してくれる、身近な医療者の1人であることに変わりありません。セカンドオピニオンは自分らしく納得できる選択をするために大変有用な仕組みです。

文献

- 1) 国立がんセンター，がん対策情報センター，がん情報サービス
<http://www.ncc.go.jp/jp/cis/ganjoho.html>.

B. セカンドオピニオンを担当する先生へ

1) 患者さん、家族への挨拶

診察室では、まず自己紹介を必ず行うこと、もちろん自分のことはよく承知の上で、セカンドオピニオンを求めてきているはずですが、社会の礼儀として挨拶は欠かせません。

2) 本日の目的を明確にする

セカンドオピニオンを受けに来る患者さんは、本来の目的である第2の意見を求めて受診する以外に、潜在的に病院を変わりたいと考えて受診する方が多い。そのため最初に、本日の目的を明確にすることが大切です。以下は私が必ず使っているフレーズです。「今日はセカンドオピニオンで来ていただきました。既に紹介状を読ませていただき、持参いただいた画像も拝見して、病状はよく理解しました。いろいろなことをお聞きになりたいと思います。遠慮なく、何でも聞いてください」。もちろん、このように説明をすると、セカンドオピニオンの目的を勘違いして驚かれる患者さんや、紹介してきた担当医もセカンドオピニオン外来の目的を勘違いしている先生がいます。いくら転院を希望しても、セカンドオピニオンの当日は紹介医への返事をもって、紹介医の元に必ず帰っていただくことにしています。転院を希望される患者さんは、再度初診外来を受診していただくことになり、手間ではあるが、近隣の先生方との信頼関係を保つためには非常に重要なことです。

3) 正しい情報を伝えるために

セカンドオピニオンで来院される再発患者さんの場合、担当医から今後の見通し（予後）等について正確な情報を聞いていないことが多い。担当医は心情的に正確に予後を言いづらく、患者・家族は担当医の何か奥歯に物が挟まった言い回しで、理解が不十分となり、お互いの信頼関係が揺らいでいる。セカンドオピニオンで話す際に、まず正確な情報（あなたにとって都合がいいことばかりではないかもしれないが）を喋っていかどうか、必ず確認をすることにしていきます。また現在の状況、これからの見通しを担当医からどのように聞いているのか？ 自分ではどう考えているのかを聞き出すことで、その後のセカンドオピニオンとしての話し方も変えることが重要です。

4) 患者さんに満足してもらうために

セカンドオピニオンに限った話ではないが、限られた時間で患者さんに満足して帰っていただくために、重要なことは自分があまり喋らないことです。聞

かれたことに対して、明確にわかりやすく、時には図を描いて説明をします。聞かれていないことまで説明をすることはしませんが、最初の聞き取りで、患者さんの現状把握が間違っている場合には、それを修正することは非常に重要な作業です。

5) 紹介医への配慮

セカンドオピニオン外来では時に、紹介医の悪口を長々と訴える患者さんがいます。もちろん標準治療と大きく異なる治療を提案し、患者さんの心情を無視した提案（患者さんがそう感じているだけかもしれないが）をするような紹介医の場合には問題ですが、多くの場合は、ほんの少しの勘違いが原因の場合が多い。これも私がよく話すフレーズですが「担当の先生は、あなたのことを本当に思っているのです、言えないこともあると思いますよ。今後も先生のところで治療を継続してもらって間違いなと思います。今日の私の意見はお手紙に書いておきますので、先生とよく相談をして、どのような治療をするか決めてください。もちろん、また困ったらいつでも担当医の先生に言って、セカンドオピニオンを受けに来てもらっていいですよ」。患者さんは、安心して紹介医の元に帰られます。